

天理教学研究と宗教学研究

諸井慶徳 (1914年3月30日～1961年6月25日) は、46歳の若さで生涯を閉じるまでに多くの著作を残した。天理教学研究に関する代表的な論稿は、『諸井慶徳著作集』(全6巻)のなかに収められている。それに対して、宗教学研究については、『宗教神秘主義研究序説』(1952年)、「宗教的主体性の論理」(『日本文化』1991年に書籍化)、そして『宗教神秘主義発生の研究』(1966年)などがある。

一見したところ、彼の神秘主義に関する研究は、それ自体で完結していたように見える。しかしながら、そうではない。天理教学における問題関心は、宗教学研究へと展開され、さらに伝道論や宗教教育に関する研究成果は、天理教学研究への情熱となって諸井を突き動かしていた。この点について、高野友治は、日本文化研究所や宗教学科で同僚であった諸井への追悼文のなかで、以下のように述べている。

諸井先生は宗教学を専攻されたというけれども、それは宗教学のための宗教学研究でもあつたであろうが、天理教学研究のための宗教学研究であつたのではないかと思う。又、私はそうであることを欲していた。⁽¹⁾

戦前の宗教学研究において、諸井は稀有なイスラーム神秘主義の研究者であった。そして、イスラーム神秘主義研究において彼が抱いた問題関心は、天理教学研究における彼の問題関心と通底していたのである。その問題関心は、神という存在の探究ばかりではなく、神を希求し信仰生活を営む人間という存在それ自体への探究であった。この意味で、諸井慶徳の思想は、天理教学的にも宗教学的にも人間学的探究であった。また、マックス・シェラーの哲学が諸井に決定的な思想的影響を与えたであろうことも、付記しておきたい。

天理教を信仰し、イスラームに関心を寄せる者として、諸井のイスラーム神秘主義研究における着眼点や獨創性を部分的にはあるが紹介したい。

イスラーム神秘主義研究の道程

「回教神秘主義—特にその信仰の実相に就て」(1941年)と題した論文を発表して以降、諸井は、「ムハマッドに於ける神秘体験の問題—原始イスラームのタッサウフ萌芽として—」(『宗教研究』130号、1952年)や、「宗教神秘主義に於ける行道の種々相」(『天理大学宗教文化研究所報』19号、1953年)を発表している。さらに、日本宗教学会において、彼は「イスラーム神秘主義の発生に就て」(1960年)と題した研究発表を行っている。

1958年、日本で第9回国際宗教学宗教史会議が開催された。会議は日本各地をめぐるかたちで開催され、宗教施設見学の一つに「天理ツアー」があった。この会議では、中山正善⁽²⁾ 2代真柱や諸井も研究発表を行った。20世紀のイスラーム神秘主義研究を牽引した研究者の一人であるルイ・マシニョン (L. Massignon, 1883～1962) もまた、同じ会議に出席していた。マシニョンは、イスラームの有名な神秘主義者(スーフィー)であるハッラージュ (Abū al-Mughīth al-Husayn al-Hallāj, 922年没)の研究で知られている。ハッラージュは、「我は神である」(Anā al-Haqq) という言葉を口にしたことで、異端者とみなさ

れて処刑された人物である。『宗教神秘主義発生の研究』では、マシニョンの著作が何度も引用されているが、イスラーム研究においてもっとも影響を受けた研究者の一人であると思われる。『宗教神秘主義発生の研究』

研究とは、研究分野や文理を問わず、地道な検証の積み重ねである。そのことは昔も現在も変わりがない。諸井の『宗教神秘主義発生の研究』は、1953年11月9日に東京大学に提出された博士論文である。天理教山名大教会長や宗教文化研究所長などの要職を担いながら書き上げた、それまでの研究の集大成であった。そして、彼が博士号を授与されたのは1961年6月21日、彼の「出直し」の4日前のことであった。

序文のなかで、諸井の兄弟子であった大島清は、諸井の学位論文の内容を次のように端的に説明している。

かかる神秘主義が発生するに当っては何よりも体験が根本であるとなす通説を反駁して、体験以前に既に或種の生の納得としての基盤があることを数多くの直接体験的資料それ自体を仔細に分析する中から明らかに指摘した。このことは凡そ宗教的体験理解に対して注目すべき事柄であろう。当事者その人にとっては直接的には体験こそ最も基本的なものであると自覚せられるのである。然し実はその体験的自覚をして成立せしめるべきより基底的なものがあることを著者が露呈せしめたのである。⁽³⁾

私たちの多くは、直接的な体験こそが、私たちの人生を決定づけると考えるかもしれない。この意味で、体験こそが最も重要なものだとみなしてしまう。しかしながら、諸井によればそうではない。むしろ、私たちには「体験以前に既に或種の生の納得」がある。誤解を恐れずに言えば、「生かされて生きている」という日々の生の自覚であろう。この自覚を基にした直接的な体験こそが、諸井の理解する「神秘主義」である。

この理解は、諸井のイスラーム神秘主義に対する眼差しにも現れている。イスラーム思想史において、神秘主義は、苦行主義(禁欲主義)を基盤に登場したというのが一般的通史である。しかしながら、諸井はこの平板な理解を退けた。彼は、預言者ムハマッドが神からの啓示のなかに、神秘主義の萌芽を見出した。「我は神である」というハッラージュの言葉は、預言者ムハマッドの口を通して、神秘家たちが語った啓示の追体験であった。

筆者自身、諸井が考究してきたイスラーム神秘主義を研究対象としているため、彼が考察したアラビア語文献や欧米文献を同様に読んできた。それゆえであろうか、諸井の筆致のなかに信仰と学問の息遣いを感じる機会が多い。天理教とイスラームのあいだに立ち、信仰は違えども、神を信じ教祖を慕う信仰者として、彼はイスラームの神秘主義者たちの信仰を真正面から受け止めた。信仰と研究の軸がぶれない諸井の研究態度に、彼自身の信仰的情熱と教祖への憧憬が感じ取れるのである。

[註]

- (1) 高野友治「教学の恩人—諸井先生」、天理教山名大教会編『追悼』、正道社、88頁。
- (2) 諸井の発表題目は、「宗教的絶対体験の類型」(Types of Religious Absolute Experience)であった。
- (3) 大島清「序文」諸井慶徳『宗教神秘主義発生の研究』、天理大学出版部、1966年、2頁。